

胃癌に対する内視鏡的全層切除術や LECS に向けた胃内洗浄液の検討～遊離癌細胞は検出されるのか？～

杏林大学外科、同病理*

大木亜津子、阿部展次、竹内弘久、正木忠彦、森俊幸、海野みちる*、大倉康男*、杉山政則、

(背景と目的) 胃癌に対する内視鏡的全層切除術や LECS では、癌腫や胃内容液が腹腔内に暴露される局面が不可避なため、癌細胞の腹腔内散布、ひいては腹膜播種の可能性が否定できないとされてきた。しかし、このような局面で癌細胞の腹腔内散布が起こるといふエビデンスもなく、そもそも胃内容液中に癌細胞が存在するか否かの基礎検討はなされていない。今回、その命題に解答すべく、胃癌症例における胃内洗浄液の検討を行ったので報告する。

(対象と方法) 早期胃癌 23 例、進行胃癌 14 例の計 37 例を対象とした。上部内視鏡検査時に滅菌蒸留水 250ml を腫瘍に勢いよく散布し洗浄液を回収した。また、ESD を施行した 13 例の早期癌症例では、全周切開が終了した時点で同様の操作を行った。洗浄液を遠心分離、細胞成分を分離抽出し、沈渣を塗抹鏡検 (パパニコロー・ギムザ染色)、細胞診による診断を行った。

(結果) 洗浄液から検出された細胞成分は扁平上皮、腺上皮、間質細胞、細菌・真菌などであった。扁平上皮の検出率は 97%、腺上皮の検出率は 35% であり、腺上皮は洗浄液中への脱落が少ない傾向にあった。進行癌 1 例(7%)から胃癌細胞を疑う異型細胞が検出されたが、早期癌では組織型や深達度にかかわらず異形細胞は検出されなかった。咽頭癌合併例で扁平上皮癌を疑う細胞が検出された。

(結論) 早期胃癌では胃内に遊離癌細胞は存在しない可能性が高い。内視鏡的全層切除術や LECS では、早期胃癌を対象とする限り癌細胞腹腔内散布のリスクはきわめて低いと考えられた。